2018年7月29日　中野教会：「聖書の学び」

**「ゼパニヤ**：**主の大いなる日は近い」**

聖書箇所：ゼパニヤ書　1:14-18、3:11-17

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日は12小預言書の9番目のゼパニヤ書からです。ゼパニヤ書を一言で言いますと「主の日」の預言書と言えます。「主の日」というのは終末の日とも言われ、神の裁きの日です。その日はイスラエルにとっての祝福の日でもあります。ゼパニヤ書は3章しかない短い預言書ですが概略を申し上げると、1章はエルサレムへの預言、2章は異邦諸国への預言、3章は裁きと未来の回復、ということができます。このような「罪の現実」「裁きの預言」「イスラエルの回復」という構成は預言書の典型的形です。この短い中に、預言書に必要な構成を完全に組み入れています。

　まず、ゼパニヤの預言した時はどのような時代だったのでしょうか。1:1にユダの王ヨシヤの時代と言われています。ヨシヤ王はユダ王朝第16代目の王で、ヨシヤ改革によりヤハヴェ信仰を回復した王として有名です。また1:1ではゼパニヤはヒゼキヤの子孫だと言われています。このヒゼキヤはユダ王朝13代目の王ヒゼキヤのことだと言われています。このヒゼキヤも宗教改革を行い、イスラエルの信仰を回復した王です。ヒゼキヤの後のマナセ、その子のアモンと、地場信仰にふけってイスラエルの信仰を軽んじた悪名高い王が続きますがヨシヤ王の時代になって再度、信仰復興が行われたのです。その時代に預言したのがゼパニヤです。著作年代はBC640年頃と推定されます。小預言書の預言者には高い身分の人物はあまりいないのですが、ゼパニヤはヒゼキヤ王の子孫ですから王家の血筋にあたる人物であることになります。

ヨシヤ王の時代は政治的には、強大な力を誇ったアッシリヤが衰退し、それに代わりバビロニアが台頭してきた時期になります。エジプトはエチオピア王朝であった第25王朝が滅び第26王朝になっていましたが勢力はまだ弱かった時期です。そのためカナンの地は両大国の圧迫から逃れ、ヨシヤ王は近隣諸国に勢力を伸ばし、曾てのダビデ・ソロモン王朝の領域を回復しようとしていました。周囲の大国からの支配がなかった数少ない時期になります。

ゼパニヤと言う名前はヘブル語読みでは「tsefaneya:」ですが、これは「隠す」という意味の「tsa:fan」にヤハウェを表す「ya:」がくっついてできている言葉です。従って、「主は隠される」という意味になります。ゼパニヤ書2:3に「主を尋ね求めよ。 義を求めよ。柔和を求めよ。 そうすれば、 主の怒りの日にかくまわれるかもしれない」とありますがこの「かくまう」という言葉はヘブル語では「sa:tar」という言葉ですが「tsa:fan」（隠す）という意味と通じています。従って、ゼパニヤという名前は主を尋ね求め、義を求め、柔和を求めるイスラエルの敬虔な人々を主が隠す、匿うことを意味している、と理解することも出来ます。

　1:2-13までは「ユダへの警告」とも言われユダ王国に対する裁きの言葉です。大変厳しい言葉を使って王国の破滅の宣告がされています。もしかしたら、このゼパニヤの預言がヨシヤ改革の契機になったのかもしれません。そういう学説もあります。

14節から1章の最後までは本日読んだ箇所です。「ユダの裁き」に続いて「世界の裁き」と称せられ、「主の日」の状況を具体的に記しています。14節には「主の大いなる日は近い。 それは近く、非常に早く来る。 聞け。主の日を。勇士も激しく叫ぶ」と言われています。終末の日の描写は聖書の他の箇所にもありますがこれだけ簡潔にまとまった描写はここが最高だと言って良いでしょう。まず、最初の、この「近い」のギリシャ語訳「egu:s」は副詞ですが、マルコ福音書1:15の「時は満ち、神の国は近くなった」の「近くなった」（egizo:）と同じ語根です。実は1:7に「主の日は近い」という表現が既にあり、この「近い」がやはり「egu:s」です。なお、ヘブル語はすべて「ka:rob」という語が使われています。この「近い」（egu:s）は「隣りにある」「手の内にあるように近い」「確実にすぐ近くに」という意味であり、“だんだん近くなっている”ということではなく、“もうわきに居る”という程度の近さだ、ということです。ゼパニヤ書での「主の日」は新約聖書での「神の国」です。すると、14節の「主の日は近い」というのは「主の日は既に脇に来ている」となり、「egu:s」の動詞形「egizo:」が使われているマルコ福音書1:15は「神の国は既に傍らにある」と訳することもできます。これが「神の国の“既に”と“未だ”の問題」と言われている問題です。ここではゼパニヤとマルコの共通の言葉に着目するにとどめ置きます。一言だけ申し上げますと、「主の日」「神の国」はイエス様と共に私たちの傍らにある、というのが福音です。

次に、“最終的な裁きの時”が即ち神の救いの完成の時でもある、ということです。逆に「神の国」の方からみると祝福の時の裏には裁きがある、ということです。キリスト教における救いの完成は神様の最終的裁きが前提になっている、ということです。また14節の最後に「勇士も激しく叫ぶ」とあります。この勇士は主なる神のことです。主なる神が自分の民に向かって怒りの叫びをあげるというのです。15-16節には裁きの日の描写が「---の日」という表現で繰り返されます。お読みします。「15 その日は激しい怒りの日、 苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、 やみと暗黒の日、雲と暗やみの日、16 角笛とときの声の日、 城壁のある町々と高い四隅の塔が襲われる日だ」とあります。人生の苦難と苦悩、大地震とか火山噴火のような暗黒、戦争による侵略がすべて一緒に来たような日です。それらが神の怒りの表現だと言うのです。

私たちは自然災害があると、一方では“これは自然がなすことだから仕方がない”というあきらめの気持ちを持つとともに同時に“もしかしたら神様の怒りの表れなのかもしれない”という後ろめたいような気持ちを持ちます。これはある意味で健全な精神です。冷静に考えてみると、自然災害による痛ましい結果の裏側には人間の深い罪が隠されていることがほとんどです。東北大震災における原発が齎した結果はその代表例です。私もこの事故が起きるまでは原発推進派でした。いろんな問題は科学の進歩で解決できるという「科学信仰」でした。この事故を契機に転換しました。原発については常識的な危機管理の考えで律することはできない程の甚大なリスクを抱えたものであることが赤裸々になりました。また、廃棄物処理についてはお先真っ暗であることも明らかになりました。これだけ警告が与えられているのですから、原発は廃止し、方向転換すべきです。「悔い改め」が求められています。与えられている「警告」を無視してはなりません。後悔しても手遅れになります。

このゼパニヤの時代も同じであったようです。17節には「わたしは人を苦しめ、 人々は盲人のように歩く。 彼らは主に罪を犯したからだ。 彼らの血はちりのように振りまかれ、 彼らのはらわたは糞のようにまき散らされる」とあります。主語は神様です。主に罪を犯したから、主なる神は人々を苦しめ、血がちりのように振りまかれ、はらわたがえぐりだされ撒き散らされる、というのです。人々は“神様もうやめてください、もう致しませんから“と叫んでいるのに神の怒りはとどまる気配はありません。最後の節ではこう言っています。「彼らの銀も、彼らの金も、 主の激しい怒りの日に彼らを救い出せない。 そのねたみの火で、全土は焼き払われる。 主は実に、地に住むすべての者を たちまち滅ぼし尽くす」。最後の「滅ぼし尽くす」は直訳すると「まさに、恐るべき状態にする」と言う表現です。地に住むすべての者たちですから、すべての人間にとどまらず、すべての動稙物を含みます。

　では主の日は最後に一度だけ来て終わり、というようなことでしょうか。どうもそうではなくその予兆は何度も現れ最後にこの主の日になる、ということのようです。過去を振り返ってみると、主が我々に対する予告を何度もされて、最後にこのような文字通りの最後の場面になる、ということのようです。戦争についてもこのようなことが言えます。戦争は人間の罪が凝縮して現れている出来事と言っても良いと思いますが、実に多くの戦争が過去行われてきました。特に近代の戦争は戦闘員ではない一般の人々を巻き込むことでその被害が甚大になることに特徴があります。そのたびごとに“もうこんな悲惨なことはやめよう”と言いつつ繰り返しています。だんだんひどくなっているようにも思えます。神様からみるとどう見えるのでしょうか。おそらく怒りと悲しみの混ざった状態のような気がします。何度も警告を受けて、その被害が大きくなっているにも拘らず繰り返す、というのはどういうことなのでしょうか。人間の罪の深さの現れ、と言えばそれまでですが、もうたまらない、というのがみんなの気持ちでしょう。日本は戦争をしなくても良い、という恵みを頂いたのに自分から“いやいや訓練された人間が居ますので戦争やらしてください。”というのは神様からの恵みを拒絶していることです。

　またこの箇所は「怒りの日」の描写としても有名です。15節の最初に「その日は激しい怒りの日」という表現があります。ラテン語で「ディエス・イレ」と言います。すべての者が生き返らせられそこで裁きを受け天国で永遠の命に与る者と地獄で永劫の責め苦を加えられる者とに仕分される時です。脅しで信仰を強要するのは問題だとしても、神の力に恐れおののく心を失っている現代社会の感受性の無さも問題です。神を畏れるというのは、畏敬、という意味での畏れですが、その元には恐怖の恐れが根底にあっての話です。主の裁きに恐れおののくのは健全な精神です。その神の怒りをせき止めてくださったのが、我らが主イエス・キリストなのです。

　2章の最初は1章の「ユダに対する主の日の裁き」に対する、「悔い改めの勧め」です。ユダの民に「恥知らずの国民よ」と呼びかけつつも、取り返しがつかないようなことになる前に、集まって、「主を尋ね求めよ、義を求めよ、柔和を求めよ」と言っています。しかし、3節の最後は「そうすれば、 主の怒りの日にかくまわれるかもしれない。」との表現であり、ゼパニヤは主が怒りを収めてくれるかは確信がない、ことが示されています。彼は、ユダの民が本当に「悔い改め」るか、どうかについても自信がなさそうです。ここの表現は「願望」の表現になっており、確たる断定ではありません。歴史を見ても、今の社会を見ても、人間集団が、本当の意味で「悔い改め」たことはないのではないか、とさえ思わされます。教会についても同様です。ゼパニヤはある意味で正直なのでしょう。

　「義を求めよ、柔和を求めよ」の部分を読むと、イエス様の山上の説教を思い出します。マタイ5:6「義に飢え渇く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。」とあり、5:5には「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。」とあります。また、エペソ4:2には「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、」とあります。ゼパニヤ書2:3の「へりくだる者」と「柔和」、そしてマタイ福音書の「柔和な者」、エペソ書の「柔和」の四つのヘブル語はすべて「a:naw」という「柔和な、謙虚な、優しい」という意味の形容詞からきた言葉です。ゼパニヤ書に添って言えば、このような人はこの後に出てくる「残された者」です。主の裁きの下で主が残した、信仰深い人々のことです。2:4以下を見ると、この柔和な「残された者」が破滅の後のペリシテやモアブ、アモンの地を受け継ぐと予言されています。マタイが言うように、「柔和な人」が地を受け継ぐことになったのです。イエス様の御言葉はゼパニヤのここを意識している言葉と思います。「柔和」と「地を継ぐ」がつなげて理解されていたのだと思われます。なお、「柔和」の反対は「高慢」ですが、ローマ・カソリックの伝統に「七つの罪」というのがありますが、その筆頭はこの「高慢」です。自己の力に頼り、神に信頼することを忘れている、ということで、いろいろな罪の中でも最悪だと言われているのです。「高慢」の堕落天使は「ルシファー」であり、「高慢」を代表している動物は「ライオン、孔雀、こうもり」です。

　続いて、諸国民への裁きの言葉が語られます。4節からはペリシテです。「ガザ」「アシュケロン」「アシュドデ」「エクロン」というペリシテの代表的な四つの町に「裁き」の表現がされています。「ケレテ人」という言葉が出てきますが、これはペリシテ人のことでギリシャのケレテ＝クレタ島から来た人たちということで「ケレテ人」と言われています。そして、ペリシテは人が済まない地になり、そのあと、ユダの家の残りの家の所有となる、と言われています。「残りの者」は裁きのあと、敬虔な信仰の故に「残された者」のことですから、裁かれた地が主に選ばれた民に渡される、ということを言っていることになります。なお、ペリシテという言葉はパレスチナのもとの言葉です。ガザを始め、ペリシテが現在も、パレスチナとイスラエルの争いの地になっているのをみると、正直、何かしら不思議な感じさえします。イスラエルは、ヨシュア記以降の旧約を繰り返そう、としているようにさえ見えます。「何かおかしいぞ」といわねばなりません。

　8節からは、モアブとアモンについての裁きです。モアブとアモンに住む人々のそもそもは創世記19章でアブラハムの甥のロトの娘二人が父と寝て生まれた子供の子孫です。聖書で忌み嫌われている近親相姦による子供の子孫という訳です。出エジプトの民がカナンの地に入るのを邪魔したこともあります。そんな関係で、ユダの民とは犬猿の仲です。その人々がソドムとゴモラのようになる、と言っています。この二つの町は今の死海の南端にあった町ですがその罪のため神に滅ぼされました。そしてユダの「残りの者」がこれを得ます。この二つの地域が実際にユダの支配下に入ったのはBC2cのハスモン王朝の時代です。今はヨルダンの一部です。

　更に12節からはクシュとアッシリヤに裁きの言葉が発せられます。クシュというのはエチオピアのことですが、今のエチオピアより広い地域を指しており、エジプトの南のスーダンあたりも含みます。エジプトはゼパニヤが予言を始める少し前にエチオピアの支配下にありましたから、彼がクシュというとき、エジプト、スーダン、エチオピアを含んだ広義のエジプトを指すと考えてよいと思います。そのエジプトが主の剣で刺殺され、北の大国アッシリヤの首都ニネベは荒れ果て砂漠となる、と言われています。アッシリヤは当時衰退し、新バビロニアとリディアに滅ぼされ、過去の栄光は失われていました。14節のところに「ペリカン」「針鼠」「梟」「烏」が出てきますが、この箇所は解釈が極めて難しい箇所です。口語訳では「はげたか」「やまあらし」「ふくろう」「からす」になっています。その他、諸々です。いずれにしても、この箇所は、人の住まない土地となり、鳥獣が我が物顔している土地になった、ということを言っています。

　諸国の裁き、として、ペリシテ、モアブ、アモン、エジプト、アッシリヤへの裁きが述べられています。十二小預言書でどの国々に裁きの預言が語られているかをみてみると、ヨエル、アモス、ゼパニヤには共通点が見られます。ヨエル書は十二小預言書で最も古いものですが、そこで、フェニキヤ、ペリシテについて述べられ、アモスは更にシリヤ、エドム、アモン、モアブを加え広範囲に裁きを預言しました。ゼパニヤは更に、エジプト、アッシリヤという二大帝国を裁きの対象に含めました。当時、両大国は、弱体化し、曾ての姿は今やなし、という状態でした。裁きの対象国の変化には時の時代状況、イスラエル、ユダ王国の置かれた状況が反映している、と言えます。

3章に入ると、「反逆と汚れに満ちた暴力の町」がでてきます。これはエルサレムのことです。「主に信頼せず、神に近づこうともしない」と言われています。4節では預言者、祭司も徹底的に批判されます。6節で主は義なる神であることが言われますが「不正をする者は恥を知らない」と切り捨てられています。ここでは神の義が強調されています。「恥」という言葉はヘブル語の「bo:shet」ですがその用法を見ると「恥、不面目、不名誉、卑下」というよう意味で使用され、バアルのことを恥ずべき神という言い方で使われる時もあります。神様との関係で顔を向けることができない恥ずべき状態、という意味で使用されているようです。日本人の「恥」は対人関係の中で「顔向けができない」状況を指して言っていますので、かなり見ている方角に違いがあります。ゼパニヤ書では不正をする者は神様に申し開きができない、恥ずべきことだ、という意味で使われています。

続いて7節から10節までエルサレムの回復のために主が労される様が描かれています。8節では「主を待て」と言われています。諸国の民を集め、怒りを注ぐ、と言います。「待て」は8節で2度繰り返されていますが、ヘブル語では「ha:qa:」という動詞です。ルカ7:19に「すると、ヨハネは、弟子の中からふたりを呼び寄せて、主のもとに送り、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか」と言わせた」とありますが、ここの「私たちはほかの方を待つべきでしょうか」の「待つ」がヘブル語では同じ言葉です。ゼパニヤ書で「主を待て」と言われ、ルカ福音書では待っていた主はそこにいらっしゃる、と言われているのです。ゼパニヤ書での「主を待て」の後には恐るべき主の裁きの日の叙述が続いていますが新約聖書での「待つ」の後にはイエス様の救いの業（わざ）が続きます。ゼパニヤにおける希望は私たちには既に実現したものです。

　11節から17節までは本日、読んでいただきました聖書箇所です。内容的に2つに分かれます。前半は「残りの者」が保護される様が描かれ、14-17節はエルサレムの回復についての歓喜の声です。11-13節はイスラエルの「残りの者」について述べられています。まず、11節で「高ぶる」に警告を与えています。“おごり高ぶる者どもを取り去り、へりくだった、寄る辺のない民を残す”と言われています。新約聖書での「マリアの賛歌」を思い出させます。ルカ1:52-54をお読みします。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、 心の思いの高ぶっている者を追い散らし、/権力ある者を王位から引き降ろされます。 低い者を高く引き上げ、/ 飢えた者を良いもので満ち足らせ、 富む者を何も持たせないで追い返されました。/主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、 そのしもべ、イスラエルをお助けになりました」とあります。共通した信仰告白が述べられています。12節では「へりくだった、寄る辺の無い民」の信仰的態度を描いていますが、これはイエス様のおっしゃられた「心の貧しき者」と通じています。“心砕かれた者”です。

13節の「残りの者」という表現はイザヤ書で確立した考え方です。イザヤ10:20には「その日になると、 イスラエルの残りの者、 ヤコブの家ののがれた者は、 もう再び、自分を打つ者にたよらず、 イスラエルの聖なる方、主に、 まことをもって、たよる」とあります。そもそもは、虐殺から免れた者の意味ですが、その後、神の裁きに堪えて残った「神の民」を指す言葉になって行きました。「sha:ar」という「放置する、残す」という意味の動詞から派生してできた言葉であり、「she-a:r」とか「she-e:ri:t」という言葉として使われます。日本語では「残りの者」「残された者」と訳されています。英語では「remnant」と言い、各種の聖書学に関する本を出版しているレムナント社という出版社もあります。敬虔なる人々の意味です。ペリシテの地は主の日にこのような敬虔なる者の所有にされる、と言われています。そして主なる神は「彼らの繁栄を元どおりにするからだ」と言っています。イスラエルの回復です。

新約聖書にもでてきます。ローマ書11:5では「今も、恵みの選びによって残された者がいます」とパウロは言っています。エリアの時代に、バアル崇拝を拒否した主なる神に敬虔な人々が残されたのと同様、今の時代に、キリスト者を「残された者」としている、というのです。迫害を耐え忍んだ「残された者」のことを指しています。パウロは私たちイエス・キリストを主と仰ぐ者達を、イザヤ、ゼパニヤ、エレミヤ等により継承されてきた「残された者」の系譜の中に入れているのです。ゼパニヤ書で言われている「主の日」におけるイスラエルの回復は、新約の世界において我々新しきイスラエルの回復として示されているのです。

14節から17節をもう一度お読みします。「シオンの娘よ。喜び歌え。 イスラエルよ。喜び叫べ。 エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。/主はあなたへの宣告を取り除き、 あなたの敵を追い払われた。 イスラエルの王、主は、 あなたのただ中におられる。 あなたはもう、わざわいを恐れない。/その日、エルサレムはこう言われる。 シオンよ。恐れるな。気力を失うな。/あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。 救いの勇士だ。 主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、 その愛によって安らぎを与える。 主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」とあります。14節の最初の「喜び歌え」の「喜び」は「ra:nan」という「こおどりして喜ぶ」という動詞です。次の「喜び叫べ」と訳されているのは「ru:a」で「勝利で叫ぶ」の意味の言葉で、最後の「喜び勝ち誇れ」は「sa:maha」という通常の「喜ぶ」という動詞と「a:laz」という「勝ち誇る」という意味の言葉が続いている表現です。更に17節の最後の「喜ばれる」は「ga:yal」という「喜びで叫ぶ」と言う意味の言葉です。なんと、5種類の「喜ぶ」が出てきています。最も一般的な「喜ぶ」は「喜び勝ち誇れ」の「喜ぶ」「sa:maha」です。他の喜ぶは若干“狂気の如く喜んで踊れ、叫べ”というような強い意味合いの言葉です。新約聖書では、この主の日の喜びを述べている箇所をいくつかあげることができます。ルカ6:23には「その日には喜びなさい、おどり上がって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。彼らの父祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです」とあります。イエス様の平地の説教の最初の方です。ギリシャ語では一般的な「喜ぶ」の意味の「kairo:」と「とびはねて喜ぶ」の意味の「skirta:o」が使われています。黙示録18:20では「おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです」といわれており、ここでの「喜びなさい」は「yu:fraino:」と言うギリシャ語で「霊的喜び」の意味です。最後の日におけるバビロンへの主の裁きを喜べ、と言っています。イスラエルを支配した罪の町バビロンへの裁き、即ちイスラエルの回復を喜ぶのです。ゼパニヤ書における「主の日」の喜びはめんめんと受け継がれ、新約聖書福音書のなかにも生き続け、黙示録で再び「主の日」の「喜び」として語られています。私たちにとっては主の再臨の日の喜びです。

「喜ぶ」という言葉だけについて言えば、ピリピ人への手紙が有名です。「喜びの手紙」と言われますがその4:4「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」の「喜ぶ」はヘブル語訳では最も一般的な「sa:maha」です。またマタイ5:12「喜びなさい。喜びおどりなさい」の最初の「喜びなさい」は「sa:maha」ですが、あとの「喜びおどりなさい」はゼパニヤ書3:17の「ga:yal」で「喜び叫ぶ」意味です。実に沢山の「喜ぶ」があります。喜びの表現としての歌う、叫ぶ、踊る等によってそろぞれ「喜ぶ」の言葉があります。なかでもゼパニヤ書の3:14-17は絶品と言って良いと思います。

14節のシオンの娘というのとエルサレムの娘というのは同じことを指していますがシオンの娘はエルサレム神殿のあるエルサレムの人々と言う意味で宗教的意味合いが強い表現です。イスラエルというのはヤハヴェ信仰の共同体であるイスラエルの人々というということです。この3つの言葉は実質的には同じ人々を指しています。またイスラエルの娘という言い方の少ないですがあります。「シオンの娘」「エルサレムの娘」「イスラエルの娘」の３つの中では「シオンの娘」が最も多く使用されています。エレミヤ哀歌で多用されているので有名です。新約聖書でもヨハネ12:15「恐れるな。シオンの娘。 見よ。あなたの王が来られる。 ろばの子に乗って。」 とゼカリア書の引用の形で登場しています。

また15節の「イスラエルの王、主はあなたの只中におられる」も重要な言葉です。「あなたのただ中」です。直訳もこの通りです。この表現は17節にも出てきます。「あなたの神、主はあなたのただ中におられる」と言っています。神があなたのただ中、です。実はゼパニヤ書よりあとのゼカリヤ書に二度類似の表現があります。「（主が）あなたのただ中に住む」という表現です。ゼパニヤ書以前の文書にはこのような「主があなたのただ中におられる」というような表現はありません。旧約聖書の神と人間の越えられない距離の前提では考えにくい表現です。神の愛、しかもあなたへの愛の表現です。ゼパニヤ書で初めて現れゼカリヤ書に受け継がれた、といえるでしょう。それにしても大胆な表現です。新約聖書にはルカ17:21「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」と言う表現がありますがゼパニヤ書の「主があなたのただ中におられる」と同じ意味と理解できます。しかも我々の場合は神が人となられ、我々と共にいらっしゃるということです。今は復活の主として我々の只中におられます。このことはパウロがしばしば使用する「主にあって」と言う言葉と通じている、と言えるでしょう。17節をもう一度読みます。「あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。 救いの勇士だ。 主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、 その愛によって安らぎを与える。 主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」です。主なる神があなたの救いの勇士になってくれる、というのです。私たちはこの勇士になって下さった方がだれか今は知っています。せパニヤの預言はこのような深い意味のところで成就しています。

　14節の「喜び歌え」は有名なヴェートーベン交響曲第9番の「歓喜の歌」を思い出させるでしょう。この歌は当初はフランス革命の歌で現在のフランス国歌であるラ・マルセイエーズのメロディでシラーの詩がドイツの学生に歌われていたのが最初ということです。その詩が「歓喜に寄せて」というタイトルで書きなおされ、それをヴェートーベンが使用した、ということのようです。直接聖書の言葉を取り上げて歌っているのではありませんが、主の日にイスラエルの復興への喜びを歌いあげる最適の歌と言って良いと思います。ドイツ語で「歓喜」即ち「フロイデ」を歌いあげるこの歌はやはり何度聞いても、直立させられる歌です。この歌詞をみると中世的雰囲気が若干はありますがこれは主なる神の御業を賛美する歌です。おそらくシラーもヴェートーベンもゼパニヤ書の3:14を心に置いていたものと思います。これがアレンジされ讃美歌にもなっています。54年讃美歌の158番です。1番の歌詞だけお読みします。「あめには御使い、喜び歌え、土には世の人、御声をきけや。わが君、この日ぞ、死に勝ちませる、生命（いのち）もまことも道もイエスなり」です。

　以上のようにゼパニヤ書はそこに表現されている言葉が、新約の時代にまでめんめんとうけつがれ、それがイエス様の言葉を通して、更には、パウロやヨハネの言葉を通して、我々に伝えられている、ということです。「主の日は近い」の「近い」、「主を待て」の「待て」、「イスラエルの残りの者」、「主の日の喜び」、「あなたの只中におられる」等です。

　18節から最後までは「神の約束」を述べた所であり、散らされたイスラエルを再び集める、というイスラエル復興の約束を述べています。もう解説的なことはなく、ただ、18節以降をお読みします。「例祭から離れて悲しむ者たちをわたしは集める。 彼らはあなたからのもの。 そしりはシオンへの警告である。/見よ。その時、 わたしはあなたを苦しめたすべての者を罰し、 足のなえた者を救い、散らされた者を集める。 わたしは彼らの恥を栄誉に変え、 全地でその名をあげさせよう。/その時、わたしはあなたがたを連れ帰り、 その時、わたしはあなたがたを集める。 わたしがあなたがたの目の前で、 あなたがたの繁栄を元どおりにするとき、 地のすべての民の間で あなたがたに、名誉と栄誉を与えよう、と 主は仰せられる」。ただアーメンと一言、言って終わりとします。